

聖霊降臨節第10主日礼拝 説教「どんな時も一緒に」要約

マタイによる福音書 第18章21～35節

日本キリスト教団茅ヶ崎堤伝道所

2024年7月21日

① 神様のおられる「天の国」には赦しに限界がない

ペトロはイエス様に「何回赦すべきでしょうか。七回までですか」(21節)と質問します。しかしイエス様は、人間が考え得る数をはるかに超えて「七回どころか七の七十倍までも赦しなさい」(22節)と教えます。つまり、天の国には赦しに限界がないということです。そのことを、たとえを用いて説明されます。そのたとえはこうです。王から一万タラントンの借金をしていた家来がいました。一万タラントンは、一日分の借金の6000万倍にあたります。休まず働いたとして、16万年分以上のお金です。一人の生涯の長さを超える、計り知れない金額の借金だということが分かります。王は家来に、自分も家族も持ち物もすべて売り払って返済するよう命じます。家来がひれ伏して赦しを願い求めると、王は憐れに思い、その借金を帳消しにしてやりました(27節)。「憐れに思う」と訳されているギリシャ語の言葉は、はらわたが動かされる程の共感を表します。借金を帳消しにした王は、憐れみ深い神様を表しています。

② 仲間を赦せなかった「心の狭い家来」の話

憐れみ深い王に借金を帳消しにしてもらった家来は、自分に100デナリオン(100日分の借金に相当)を借金している仲間に出会うと、捕まえて首を絞め、貸していた少しの「借金を返せ」と迫ります。仲間はひれ伏して、「どうか待ってくれ。返すから」としきりに頼みますが、承知せず、その仲間を引っぱって行き、借金を返すまでと牢に入れてしまいました(30節)。これを知った王は「お前が頼んだから、借金を全部帳消しにしてやったのだ。わたしがお前を憐れんでやったように、お前も自分の仲間を憐れんでやるべきではなかったか」(32～33節)と言って、この家来を牢屋に入れてしまったのです。自分では返済しきれないほどの借金を帳消しにしてもらったのに、そのことは、棚に上げて、仲間を赦せなかった、心の狭いこの家来は、私たち人間の姿を表しています。振り返って私たちは、イエス様の十字架によって、すべての罪を、ことごとく赦してくださった憐れみ深い神様の大きな愛をいつも思い起こし、他の人の罪や弱さを赦す心を与えられたいと思います。

③ どんな時も一緒に

借金を全部帳消しにしてくれた王は、神様のことです。神様は、その人が悪いことをしていても、その人に重荷を負わせるのをやめて、その人を受け入れ、一緒にいてくださるお方です。「こんなことをしてしまった私は、受け入れてもらえないんじゃないか」と思っても、神様はすべてを受け入れて「あなたは大切だよ」って言ってくださいます。この神様の大きな愛を思うと、心が温かい気持ちになり嬉しくなります。なのに私たちは神様の愛を忘れてしまいます。仲間を赦さなかった家来のように、人を赦せないのです。いやな事をされても、ちゃんと向き合って、何がいやだったかを伝えて、「ごめんね」「いいよ」と言い合えたらいいですね！いやな思いをした時、イエス様がずっと一緒にいる事を思い出して下さい。イエス様は自分の身を投げ出して私たちを大切にしてくれるお友だちです。私たちとお友だちでいてくださるイエス様は、私たちといつも一緒です。どんな時も、神様は私たちを受け入れてくださいます。イエス様は、どんな時も私たちと一緒にいるお友だちです。だから私たちも、お友だちと喧嘩しても仲直りして一緒にいられたらいいですね!!